

平成 ななわ女

人物誌

6

西野レディースクリニック院長 西野 照代さん

「すべてが完璧じゃなくていい。」

医師としての自分も、母親としての自分も、
全部あわせて100%の自分になればいい。」



女性なら、必ず一度はお世話になるであろう産婦人科。西野さんはこの道20数年のベテラン先生であり、自身も二人のお子さんを待つお母さんである。

数ある診療科のなかで何故産婦人科を選択されたのですか?という問いに、少し間をおいた後「全科を回ってみて、手術をしたと思ったことと、おめでとう」が言える場所だと思ったから。」大学卒業と同時に専門課程を決めなければならぬ。医者なんてものは、本当ならお近付きになりたくないもの。好き好んで医者にかかりに来る人はいない。その中で「おめでとう」と笑顔で迎えられるのが産婦人科だった。

男性9割に対し、女性医師が1割という時代に研修医生活を送った。そしてその間に結婚、妊娠。「つわりのつらさはよく分かりますよ。」と笑う。九ヶ月までは働こうと思っていたが、八ヶ月のとき研修中に破水して緊急入院。絶対安静の日々を送り、やがて出産。その後周囲の協力を得て、すぐに職場復帰した。朝は病院内にある保育所に子どもを預けてから仕事。夜勤の日はある様や同じ病院で働いていた医師の妹さんが交代で送り迎えをしてくれたり、面倒を見てくれた。今でも出産後の女性が社会復帰をすることは簡単ではない。当時ならなおさらはず。「仕事を続けたいならあまり離れているべきではない」と思ったから、早く復帰したかった。」2人目のお子さんの出産後もすぐに復帰し、医師と主婦と母親という仕事に

打ち込んだ。「でも悩みもありましたよ。」それは友人に「医師の代わりはいるけど、お母さんのかわりはいない。」と言われたことや、すべての仕事を完璧にこなせないこと…。しかし次第に「すべてが完璧じゃなくていい。医師としての自分も、母親としての自分も、全部あわせて100%の自分になればいいじゃないか。」と思うようになった。

日中は医師としての仕事をこなすかわら、少しでも時間があれば仮眠も取らず、家へ戻り、そうじや洗濯をし、ごはんを作った。夜勤後も仮眠しないで必ずお弁当を作った。休日に緊急手術が入れば、子ども二人を病院に連れて行き、手術中はナースステーションでお絵かきをさせた。周りの看護師さんたちも理解し、面倒を見てくれたという。借りられる手はずで借りた。「周りの人の協力があったからこそ、今までやってこられたんだと思います。」

一昨年まで勤務していた大手前病院では産婦人科の医長をつとめており、大きい病院で女医さんで医長だからとわざわざ診療に来られる方も少なくなかった。そして限られた外来診療の日は、常に大勢の患者さん。2時間も3時間も待つことは当たり前…。なのに大勢を一人で診るため、短時間で終わらせねばならない。そんな顔を見る余裕もない診療に疑問を感じ、一念発起し、地元である谷町で「西野レディースクリニック」を開業。「大手前病院を離れて出来なくなったことは勿論あるけれど、

わざわざ患者さんがここを探して来てくれたり、きちんとお話しする時間が持てるようになったことが嬉しい。」患者さんも「以前は先生がお忙しそうに話す時間もなかったけど、今はそれが出来る。」と喜ばれているという。中には、わざわざお話しをするために訪れる人もいる。最近では婦人病について正しい知識を知って欲しいという気持ちからコラムの連載をしている。「きちんと自分の体を知り、おかしいなと思ったら検査を受けて欲しい。何かあった時では遅いのだから。」

休日はお母さん業に専念。ほぼ一日中台所にいるそうだ。働くお母さんらしく、得意料理は手抜きに見せない手抜き料理。これだけ忙しい毎日でも趣味と言えるものも持てなかつたと語る西野さんだが、合間を見て、大好きな推理小説を読み漁る。しかし日頃の疲れと睡眠不足が災いして数ページ読んでるとすぐに睡魔に襲われるとか。その代わりストレス解消にはもっぱらドライブが一番、と話を聞いてみると、河内のおちゃんもビックリのスピード狂のようだ。

「根は大阪のおばちゃん」と自負する飾らない性格とおおらかな雰囲気、悩みを打ち明けたくなる気分にさせてしまふ西野さん。「働くお母さん」の姿について頼もしさを覚えた。

西野レディースクリニック

大阪市中央区徳井町1-1-8

(大手前メディカルセンタービル8F)

TEL 06(6994)1501